

創立1880年



東京YMCA

2008 12月号

発行所 東京キリスト教青年会 発行人 新井廣和
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。

(ルカによる福音書第9章16〜17節)

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましく子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

世界の人が平和に暮らせる社会へ

東京YMCAは、その使命にうたわれているように、地域社会で様々なプログラムを展開すると同時に、世界の人々と共に公平で平和な世界をつくるための働きを担っている。人々が平和に暮らせる社会を、自分が暮らす地域だけでなく、世界に実現できたらどんなに素晴らしいだろうか。しかしそのことを可能にするためには、違う国に暮らす人々を隣人として受け入れ、共感し、共に働く必要がある。

例えば東陽町センターには毎日1000人近い人々がプログラム利用のために足を運ぶが、その人々は同時に、海外のYMCAとのパートナーシップを通して世界の人々と繋がりを、隣人となることができる。特に未来の社会を担う子どもや青年たちは、平和な社会を実現することができる可能性を、無限大に秘めていると言えるだろう。

クリスマスに寄せて、海外YMCAとのパートナーシップの変遷を振り返りながら、世界で、社会で、必要とされる人々への働きを考えてみた。
(山根一毅 国際部)

「共に歩む」とは、交流・協力プログラムを円滑に進めることのみならず、こうした様々な状況を含めて、パートナーYMCAを受け入れ、認め、そして必要に応じて協力を行うことを意味する。なぜなら、地域にとって最もふさわしい活動は、地域のYMCAとそこに連なる人々を選び取っていくものだからだ。

「共に歩む」とは、道の途中で転んで怪我をした友人に手を差し伸べ、痛みが引くまでその場で待っていてあげることだろう。「共に歩む」とは、2人で仲良く歩くだけではなく、多くの仲間と支えあひながら前進することだろう。これからのパートナーシップは、このように築いていくことが必要なのではなかろうか。

バンングラデシュとハワイ島の例は、地域のYMCAが主体的に活動できる時期を忍耐をもって待つことであり、同時に私たちに何ができるのか、東京YMCAの「強み」を確認し、必要に応じてそれを提供することでもあろう。その強みとは、東京YMCAを支える会員の存在や、日々献身的に奉仕をしてくれているボランティアリーダーをはじめとするユースたちではないか。北京・ソウル・フロストバレーも、これまでのパートナーシップをさらに発展させていくことが望まれている。具体的には、今年5月に起きた中国・四川大地震の被災地に対し、東京・ソウル・北京の3YMCAが協力して支援を行うと、各国からのユースが被災地で共に汗を流し、被災した子どもたちへのプログラムを展開する計画が進められ、フロストバレーについても、近い将来に再開を見込んでいるバンングラデシュでのユースワークキャンプに、フロストバレーYMCAのユースリーダーが参加することを計画している。このように、パートナーシップを1対1の関係にとどめておくのではなく、東京YMCAがハブとして世界をつないでいく動きが始まろうとしている。

赤三角

アドベントを迎えクリスマス・クリップを窓辺に飾った。質素な生活をしてきた友人から5年の月日をかけての贈り物である。聖家族中心の人形に、羊、馬、博士が毎年追加されてきた。▼教会学校の教師をしていた経験から、東京YMCA国際部のクリスマス祝会でメッセージカードを披露したことがある。天使ガブリエルやヨセフ、マリヤ、宿屋、羊飼、博士などには歌唱力のあるワイズメンズクラブ、合唱団、会員、主事の方々が出演した。留学生は宿屋、天使、羊飼いとそれぞれに配置され、「うちは、もう満員です。外の宿屋にいらしてください」と、日本語のセリフに集中していた。つれない言葉だが、「馬小屋なら空いています、どうぞお泊りください」の声にホッと降誕物語を形にするクリスマス・スマスの共通の祈りに導かれる。彼等は国に帰ったときに、この場面を思い出すだろうか。▼クリスマスをどのように祝うか、祈るかは環境によるけれども、その生きる場所において、共に平和に、争いもなく暮らすことが人々の願いである。困っている人々にやさしい言葉をかけたい、貧しい持ち物だけれども、慰めを必要としている隣人へ「愛のアプレント」を用意したい。これが毎年のアドベントの課題だ。▼ロソクに象徴される「馬小屋の光」は、この季節ばかりでなく永遠の輝いメッセージだから。(会員部・ミッション推進委員 佐藤茂美)